



■水辺をまちに引き込み、まちを水辺に引き出す  
新潟の発展は、水との闘いの歴史であり、信濃川とまちの関係は希薄である。我々の提案は、後背の町の文脈を活かしながら、水辺の性格を際立たせ、水辺と一体化した魅力的なまちをつくるものである。

■後背のまちのアクティビティで水辺の性格を際立たせる  
後背のまちの文脈と対応させることで、後背のまちと相互補完的な水辺空間とし、その場所特有の人の振る舞いを浮かび上がらせる。

□水辺を活かす制度デザイン  
関屋分水で流水量を保障された信濃川下流域は、非常時のリスクが低い。河岸の使用規制を緩和し、水辺空間を特徴づけるための背中を押す。

■【万代地区】まちとやすらぎ堤を一体化  
水辺の「ひろば」と定義される右岸やすらぎ堤を地区に引きこむために4つの「やすらぎ」を万代地区に組み込む。

□車依存脱却の3つの輪  
新潟駅-万代-古町-白山駅をつなぐ新交通の輪  
やすらぎウォークによる徒歩の輪  
水上バス、水上タクシーによる舟運の輪

□誘導的景観デザイン  
原状の高さ制限ではなく、容積ボーナス制度により調和的な景観を誘導する。

□災害に備える  
やすらぎウォークは、増水、液状化、津波といった災害の退避場所として機能し、やすらぎ広場は帰宅難民の救援拠点となる。

□見る／見られる 萬代橋  
視対象としての周辺視点場の整備、視点場としての視点軸の保全の2側面から萬代橋のブランディングを進める。

□官民協働で事業推進  
事業はランドデザインを共有しながら、協議会制度、アダプト制度、指定管理制度、PFI 事業、PPP 事業など、状況に応じて適切な手段を選択し、官と民が協働しながらすすめる。

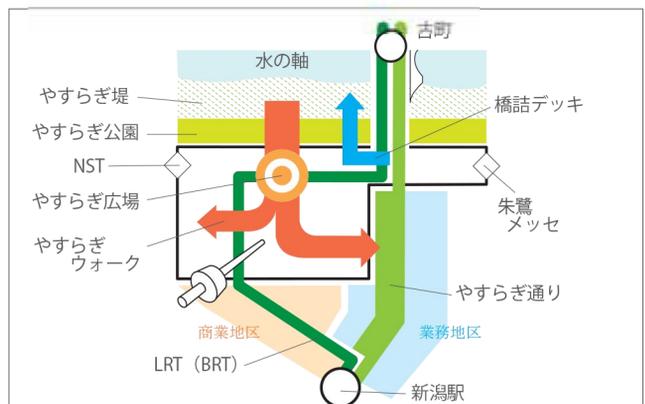
□3つのフェーズによる15年の計  
新潟駅高架事業完了(2026年)までを3つのフェーズに分け、まちと水辺の融合、車依存からの脱却、歩行者空間の整備、地域イメージの構築の4側面から目標を設定し、ソフト・ハード両面から事業を進める。



やすらぎ広場

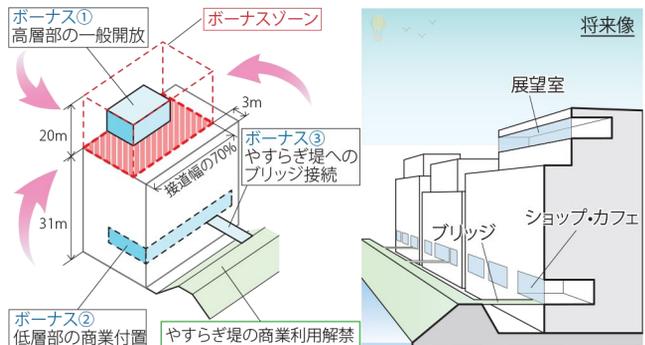


水辺の性格づけ



- 【LRT (BRT)】新交通が街中を貫く  
LRT (BRT)は万代地区の中心を貫き、まちなかの演出装置として機能する。
- 【やすらぎウォーク】やすらぎ堤を引き込む  
既存のペDESTリアンデッキの改修と新設によって、やすらぎ堤から万代地区へつながる歩行者空間を形成する。新潟の気候を配慮し、歩行者空間は半外部空間とし、通路の商業利用や広告設置を前提としてPPP事業で推進する。
- 【やすらぎ広場】水陸の公共交通を結節  
陸運局跡地をLRT (BRT)、バス、舟運の結節点とし、やすらぎウォークと交錯した屋内型まちなか広場とする。新生新潟の象徴であるLRTは広場の中心を貫通する。
- 【やすらぎ通り】都市軸を緑の軸に  
LRT (BRT)の交通分担分で車線減少させ、緑地帯(やすらぎ通り)をつくる。業務地区のアメニティ空間として機能するほか、信濃川(水の軸)と都心軸(緑の軸)が交錯する都市イメージを形成する。
- 【やすらぎ公園】分断道路を公園に  
やすらぎ堤とまちを分断する道路を歩者開放する。公共交通へのシフトに合わせ、社会実験、歩行者天国といった順を踏みながら恒久化する。
- 【橋詰デッキ】水辺を活かした回遊性  
萬代橋橋詰からデッキを経由し、やすらぎ堤に接続する。やすらぎウォークとの連携により万代地区に回遊性を生み出す。

水辺とまちを一体化する



誘導的景観デザイン